2003/10/6

＊キリスト教学特殊講義＊＊＊＊　S.Ashina

＜年度初めの予定＞

第四章：精神と宗教

　4－1：精神とはードイツ観念論とキリスト教思想－

　4－2：生の次元論と精神－新しい次元の創発性の理論化に向けて

　4－3：社会システム論とパラドックスールーマンー

＜講義計画の変更＞

1.「第四章：精神と宗教」は次年度に講義

2. 2003年度後期は、第五章として以下の内容を講義する。

第五章：キリスト教自然神学と生命論－生命、進化、環境－

　5－1：キリスト教自然神学とは何か－起源とその展開－　10/6

　5－2：ニュートン主義の自然神学と生命論　10/20

　5－3：キリスト教思想と進化論　11/10

　5－4：環境論から見た自然神学　11/17

　5－5：まとめ　12/1

　＜Exkurs＞

　　キリスト教と形而上学の問い　10/27

第五章：キリスト教自然神学と生命論
―生命、進化、環境―

５―１：キリスト教自然神学とは何か
―起源とその展開―

(1) キリスト教神学の起源

1. ストア哲学における神学の三分肢体系：哲学的神学、国家的神学、神話的神学
（アウグスティヌスの『神の国』第6巻第5章）

2. 三位一体論とギリシャ哲学
キリスト教が地中海世界の文化状況に適応するプロセス、それを支える知的営み
聖書的伝統とギリシャの哲学的伝統　→　自然神学の必然性・その位置

3. ＜文献1＞

・Ingolf Ulrich Dalferth, *Theology and Philosophy, Oxford　1988*

・W. Pannenberg, *Theologie und Philosophie.Ihr Verhältnis im Lichte ihrer gemeinsamen Geschichte*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1996

(2) 自然神学の一般的理解

４. *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, 3rd. edition, p.1132r.

＜ Natural Theology ＞

The body of knowledge about God which may be obtained by human reason alone without the aid of Revelation and hence to be contrasted with 'Revealed Theology'. The distinction was worked out in the Middle Ages at great length, and is based on such passages as Rom. I:18ff., acc. to which man is capable of arriving at certain religious truths by applying his natural powers of discursive thought. ……The chief objects of Natural Theology are God in so far as He is known through His works, the human soul, its freedom and immortality, and Natural Law. Hence, strictly speaking, Natural Theology is part of philosophy and treated as such in the systems of Scholasticism. Reformation theology generally rejected the competence of fallen human reason to engage in Natural Theology; and in modern times this incompetence has been reasserted with emphasis by K. Barth and the Dialectical School. Modern theologians sympathetic towards the ideals of Natural Theology often present their views under the heading of 'Philosophy of Religion'.

５．Anthony Kerry, *What is Faith ? Essays in the Philosophy of Religion*,

Oxford University Press　1992

Natural Theology, it is sometimes said, is neither natural nor theology. It is not theology, but philosophy , it is the philosophical study of questions concerning the existence and nature of God. It is not natural, but highly artifical: it is a discipline which came into existence only after both philosophy and theology had reached a mature stage of their development.

Some philosophers deny that there can be any such thing as natural theology, because, in their view, all talk of God is an idle use of senseless language. But if that is true, it takes philosophical argument to show it; and that argument will itself be, in a broad sense, a form of natural theology. (63)

(3) 自然神学の起源

6．「出会いと総合とはいわゆるカッパドキアの三教父、つまりナジアンゾスのグレゴリオス、カッパドキアのバシレイオス、ニュッサのグレゴリオスの三人の思想と後の二人の姉でありいわば＜第四のカッパドキア教父＞であるマクリナの思想において具体化された」(Pelikan[1993], p.ix)。

7．カッパドキアの教父の自然神学は、「時代の内部で様々な諸体系の支持者たちがすべて無意識に前提している根本的な仮定」なのである(ibid.,)。

8．弁証としての自然神学と前提(presupposition)としての自然神学

9．ヘレニズム文化に対する肯定と否定の二重の関係（弁証法的関係）

＜肯定＞「ギリシャの哲学の諸学派の目録を列挙するのはカッパドキアの教父たちが好んで用いた修辞的な手段であった」(ibid., p.19)。「カッパドキア教父らの、そして教父時代からビザンチン時代を通じた全体としてのギリシャ的キリスト教の伝統の自然神学は、ヘレニズムとの出会いの産物であった」(ibid., p.21)。

＜否定＞「彼らはギリシャの宗教と文学の＜神話＞とギリシャの思想家における＜自然神学者＞とを区別した。キリスト教とヘレニズムとの出会いが主要に関わっていたのは、これら

の＜自然神学者＞であった」(ibid., p.28)。

10. ギリシャ文化のある部分（例えば哲学思想）とキリスト教との共通性（多神教的神話の批判）を手がかりに、ギリシャ文化のその部分を受容しつつ、他の部分（神話と儀礼）は拒絶するという仕方で思想を展開した。「道徳的で自然的な哲学」（ニュッサのグレゴリオス）。

11. 「自然」：外的自然世界という意味に限定されるのものではなく、むしろ第一義的には人間としての自然本性を指している。人間の本性に内在しており、その点において特定の文化圏や時代を超えた普遍性を有している（カッパドキア教父が古典ギリシャの自然神学において注目したのは、魂の不死性の教説、神論、創造論、善にして力強い神の摂理の教説の4つ）。

12. 自然神学の受け手の変化　→　「異端に対する論証における諸前提」

「カッパドキア的な弁証としての自然神学と前提としての自然神学との間の非連続と連続とは、少なくとも部分的には4世紀の革命的な政治的、教会的、そして文化的な出来事によって引き起こされた聴衆の変化に根ざしている」(ibid., p.186)。

「違いは、正統派がこの共有された諸前提から正しい三一論的またキリスト論的な結論を引き出したのに対して、異端派はそうしなかったことである。しかしながら、エウノミオスに対する論争における他の諸点においては、ニュッサのグレゴリオスが扱った諸前提は少なくとも部分的には自然神学に基づいていた」(ibid.,p.188)。

13. キリスト教的自然神学の構築＝「古代ギリシャの自然神学の変貌(metamorphosis)」

キリスト教自然神学の独自性はその担い手である思想家の独自性から解明できる。

「カッパドキアの教父たちの神学における弁証家としての課題は、福音伝道者としてのまた牧会者としての課題と密接に関連していた」(ibid., p.34)。「古典的体系においては、自然神学は祭儀的実践と伝統的な宗教的しきたりについての二次的物語とに対するもう一つの選択肢として、あるいは解毒剤としてもっぱら提示される傾向にあった。その主要な解説者は、伝統的なしきたりの公的な代弁者でも、また祭儀の司祭でもなく、俗人の哲学者や弁証家だったのである。また、彼らはしばしば伝統や祭儀に対する敵対者あるいは批判者であり、懐疑主義者や不可知論者、さらには無神論者でさえあった」(ibid., p.38)。

14. キリスト教自然神学とは何か。

①自然神学は異文化に対する弁証（古典文化への弁証）と異端に対する論駁（教会に対する教義学）という二つのフロントにおいて成立し ──「二つのフロントの戦い」(ibid., p.199)
──、これらを相互に連関づけている神学的思惟である。

②キリスト教神学は論理の整合性を基本とする自然神学的合理性との一致と、啓示内容への相関性という二つの条件によって規定される。「カッパドキアの四人のすべてにとって、ニカイア的な正統主義は、自然神学の諸前提と＜一致＞すると同時に、啓示神学の諸前提と＜首尾一貫＞した体系として存在しているのである」(ibid., p.195)。自然神学は啓示神学の内容を弁証あるいは論駁という場において合理的に展開するという課題を担っており、そのために有効な概念構築が試みられたのである。

③自然神学は、弁証と論駁という他者とのコミュニケーションにその成立の場を有しているのであり、自然神学は、この意味において、キリスト教思想のコミュニケーション合理性の問題と解することができる。「キリスト教神学は古典文化の最良のものとの間で、多くの他のアプリオリな諸仮定だけでなく、＜神＞や＜神的自然＞の定義をも共有しているということを前提することができたのである。キリスト教神学は、それらの仮定や定義と正統主義とが＜首

尾一貫＞し＜一致＞していることを、ギリシャ的体系と他のキリスト教の諸体系とに対して弁護する義務を負っていたのである」(ibid., p.196)。

＜文献2＞

・Jaroslav Pelikan, *Christianity and Classical Culture. The Metamorphosis of Natural Theology in the Christian Encounter with Hellenism*, Yale University Press 1993

, *What Has Athens to Do with Jerusalem? Timaeus and Genesis in Counterpoint*, The University of Michigan Press 1997

・土井健司 『神認識とエペクタシス』(創文社) 1998年

(4) 自然神学の可能性ーコミュニケーション合理性としての自然神学ー

15. 神の存在論証における「論証」(argumentum, demonstratio)とは？

すべての人間において共有される基本的前提に基づく論証（モデルとしての、ユークリッド幾何学）という意味での「論証」ではない。近代的な無神論者は、古代中世の存在論証の主なる論証相手ではない。

16.『プロスロギオン』（アンセルムス）や『神学大全』（トマス）のコンテクスト

17. トマス『神学大全』第一部第二問第三項「神は存在するか」(Utrum Deus sit)

第一項「神在りということは自明であるか」(Utrum Deum esse sit per se notum)

第二項「神在りということは論証されうるか」(Utrum Deus esse sit demonstrabile)

・第一項：神概念が「在る」を含意するとすれば、「神在り」は自明(per se notum)となり、この神概念の解明以外の論証は不要になるが（アンセルムスの立場）、神在りはそれ自体としては自明であっても、「神が何であるか」を我々人間は知らないのだから我々にとって神在りは自明ではなく、論証を要する。

・第二項：この論証は人間にとって可能か、可能であるとすればそれはどのようにしてであるのか。トマスは神について知られる事柄に関して、信仰箇条の内容となる事柄と自然理性によって知られる事柄とを区別し、後者の理性によって知られる事柄は信仰箇条ではなくその前提であると答える。

18.「もっとも、これ自体としては論証され知られうることが、その論証を理解するだけの力のない人によって＜信ずべき事柄＞として受け取られることがあっても、それはいっこうかまわない」(Nihil tamen prohibet illud quod secundem se demonstrabile est et scibile, ab aliquo acc ipi ut credibile, qui demonstrationem non capit)。

19. ＜信ずべき事柄＞(credibile)：厳密な意味における啓示神学の事柄だけでなく、自然理性の事柄も含まれる

自然理性による活動としての哲学（そして、個別科学も）と啓示によって可能になる神　学との接点　→　自然神学の可能性

20.「論証」とは、一定の原理（『神学大全』の原理＝信仰箇条）を承認する人々との間ではじめて可能になると言わねばならない。論証は原理の証明を意味するのではなく、この原理を認める者たちがその原理から導き出されるものをめぐってなされる。

21.「しかしながら、もし彼が原理を全然認めない場合は彼と議論することができない。しかしそ

の場合でも、彼が持ち出す反対の理由を論破することはできるのである」(si autem nihil concedit, non potest cum eo disputare, potest tamen solvere rationes ipusius)。「人間理性による論証は信仰に関する事柄を論証するには無力である」(licet argumenta rationis humanae non habeant locum ad probandum quae fidei sunt)、「聖なる教は人間理性をも用いる。しかしそれは理性によって信仰を証明するためではない。……この教が理性を用いるのは、この教のなかで伝えられた何か他の事柄を明瞭にするためである」(Utitur tamen sacra doctrina etiam tatione humana: non quidem ad probandum fidem, quia per hoc tolleretur meritum fidei; sed as manifestandum aliqua alia quae traduntur in hac doctrina)

22. 自然神学がもし何らかの説得力を有するとすれば、それは無神論者に対してではなく、異端者に対してである。

23. 自然神学の可能性を論じる際のポイント

①自然神学、とくに神の存在論証は信仰を前提とした思想的営みであり、啓示神学と諸科学との媒介を意図している。

②自然神学あるいは神の存在論証は信仰内容をめぐるコミュニケーションにおける合理性の確保の問題と解することができる。信仰対象である神との関係で言えば、それは祈りや讃美のコンテクストにおける信仰の表明であり、同じ信仰を有する共同体内部では信仰者各自の信仰内容の合理的表現を可能にし、信仰内容が変質し逸脱するのを防ぐ機能を果たしうる。また、信仰者自身にとっては、信仰内容の自己理解を促す。以上は信仰共同体の内部コミュニケーションであり、自然神学はその合理性の確保に関わっていることになる。次に、異端者や有神論的異教（キリスト教に対してはユダヤ教、イスラム教など）に対しては、自然神学は、論争相手がどんな原理に立っているか、またお互いが原理のどの部分を共有しているか、一致できない部分は何か、などを明確化し、その上で論証が可能な場合にはその論証の合理性を確保するのに貢献しうる。もちろん、論証が不可能な場合は、相互の論破という作業に移る。無神論者の場合も理論的には異端者や異教の場合と同様であり、こうした外部コミュニケーションにおいて自然神学のなす貢献は、共通の議論の場を明確にし、対話可能性の範囲を明示することである。いずれにせよ、現代に思想状況において自然神学の可能性を考えるときの第一のポイントは自然神学が宗教におけるコミュニケーション合理性の問題と考えうるという点であろう。

③「意図からの神の論証」は神の存在論証の主要なパターンの一つであり、ニュートン主義の自然神学において重要な位置を占めていた。しかし、論証という点ではもっとも問題視されているのはこのパターンの論証であり（科学の説明できない現象のギャップを指摘しついでそれを埋めるものとして神を持ち出す）、この立場をとる者は科学の進歩によって繰り返し後退を余儀なくされる。少なくとも、キリスト教信仰の合理性の根拠を示すためにこのタイプの議論に依拠することは、神学としては危険である。

④自然神学の可能性の問いは、キリスト教信仰の可能性の問い（あるいは宗教の可能性）とも無関係ではない。非合理性に開き直るキリスト教は特殊なカルトあるいはセクトとしては存続できるとしても、おそらく歴史的キリスト教からは完全に逸脱したものとなってしまうであろう。自然神学の再構築は現代キリスト教思想にとって重要な課題の一つなのである。

＜文献3＞

・Dieter Henrich, *Der Ontologische Gottesbeweis. Sein Prblem und seine Geschichte in der Neuzeit,* J.C.B.Mohr 1967

・Horst Seidl(Hrsg.), *Die Gottesbeweise in der "Summe gegen die Heiden" und der "Summe der Theologie". Text mit Übersetzung, Einleitung und Kommentar. Lateinisch-Deutsch* (PhB 330), Felix Meiner Verlag 1982(1996)

・Alvin Plantinga, *The Nature of Necessity*, Clarendon 1974

・John Hick, *An Interpretation of Religion*, Yale Univ. Press 1989 pp.73-95

・Don S. Browning / Francis Schüssler Fiorenze(ed.), *Harbermas, Modernity, and Public Theology*, Crossroad 1992